



2020年7月号(No.4)
 公益社団法人 日本山岳会
 The Japanese Alpine Club
 東京都千代田区四番町5-4
<https://www.jac1.or.jp>
 編集担当: 新井 梓

3カ月に一度発行する「山」YOUTH版では、YOUTH CLUB 世代の会員のご活躍、東京や各支部のYOUTH CLUBの取組みなどをご紹介します。話題のご提供や感想など、ご意見何でもお待ちしております!

ヤマトモ 総務担当理事/柏澄子

with コロナで Team KOI を立ち上げた

今年のゴールデンウィーク、新型コロナ災禍下で突如立ち上がった山岳関係者のプロジェクト「Team KOI (チーム コイ)」。5月29日に公開されたヤマケイオンラインの記事「登山を再開するために、『登山 with コロナ』のリスクマネジメント」によって、その存在を知った人も多いのではないのでしょうか。メンバーは、当会の柏澄子理事(山岳ライター)を中心に、山岳ガイド、医師や山小屋の関係者、編集者など、多彩な面々9名で構成。今号では Team KOI が目指すもの、チーム結成に至った柏理事の“つながり力”についてお聞きます。

——登山も日常生活も自粛せざるを得ない中、Team KOI という、山岳業界の横の繋がりを生かしたプロジェクトが立ち上がったと知って、勇気づけられました。この Team KOI がどんなことを目指しているのか、そこに至る柏さんの山の人々との関わり方について、お聞かせくださいますでしょうか。

柏 Team KOI は、私と登山道具レンタルや登山ツアー会社を営む山田淳さんが中心となり、新型コロナウイルス感染拡大に直面した登山社会の進むべき道を模索したことが設立のきっかけです。様々な職能を持った方の力が必要だと思い、今のメンバーに声かけしました。医師のふたりは救急専門ですが、野外医療、災害医療、離島医療などに挺身してきた人々で、山岳関係者との交流も深いです。with コロナでの登山を考えると、そういうメンバーの知識や経験はとても重要です。ヤマケイオンラインには、Team KOI で3本の記事を載せました。メンバーで何度も時間をかけて話し合い、丹念に意見交換をして、記事にしました。また、登山関連企業の協賛を受けて、with コロナの登山の留意点をイラストにしたポスターを作り、登山道具店、山小屋や交通機関などに掲出して、登山者にメッセージを送っています。

——すでに議論の成果を形にして発信されているのですね。スムーズな動きも素晴らしいですが、社会の問題に対して「すぐに何かしなくては」という気持ちはどういったところから湧いてきたのでしょうか。コロナ以前から、柏さんは、山岳医療に関する

オンライン会議中の Team KOI のメンバー (最下段が柏さん)



書籍を出されたり、女性やビギナーの登山をサポートする活動をしてられています。Hitsuji Project や故田部井淳子さんと女性登山をサポートする MJ リンクを運営するなど、女性の登山をもっと身近なものにするという活動に携わってられました。

柏 意識してテーマを掲げてきたつもりはないんです。周囲から声をかけてもらうことが多くて。田部井さんから突然、「女性を登山に誘い出すためのプロジェクトを始めたいから一緒にやろう」と言われたのがきっかけでした。(笑)。それに、シリアスに登り続けるクライマーの美学を描き出すことにも関心があります。いつも思っていることは、大好きな山の世界を大切にしたいし、広く深く知りたい。心が動かされたことは書きたい。そして大切なのは、伝えるときに「独りよがりにならない」ということ。——「独りよがりにならない」という意識が、柏さんの発信する情報に客観的な視点を与えて、その結果、文章が多くの人々の信頼を得ているのかもしれないですね。ところで、ご自身もヒマラヤなど海外の山にも登っている柏さんが、「書いて伝える」と

いう手法を選択したのは、どんなきっかけだったのですか？

柏 大学山岳部の時に白神山地へ入る機会があり、当時展開されていた青秋林道の建設反対運動を目の当たりにしたんです。青秋林道は青森県・西目屋村から白神山地を縦断して、秋田県・八峰町を結ぶ約28kmの基幹林道として計画されたものでした。計画は白神山地の自然の姿を大きく変えてしまうもので、その問題を知り、初めて心がえぐられるような痛みを感じたんです。それまで、登山者の多いアルプスばかりに行っていましたから、人っ子ひとりない原始的な自然に、衝撃を受けたんですね。部のみんなにも知ってほしいと思って、山行報告書に白神山地の自然のことを書いたのを覚えています。今思えば、あれが私がペンで何かを伝えたいと行動した最初です。

——自然保護運動がきっかけだったのですね。Team KOIも、社会と山の世界の繋がりを媒介してくれる、通訳者のような存在だと感じます。

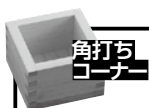
柏 発信しっぱなしにはしたくないんです。withコロナの登山に関する文章を発信した以外に、私たちはwithコロナの山小屋営業に関する提案も作りました。これをある山域の山小屋の皆さんが受け取ってくださいました。その方たちは私たちの提案だけでなく、行政発信のガイドラインなど様々な情報を基に感染予防策を練って営業されていますので、私たちはその様子を見学させてもらっています。私たちの提案がどのように役立ったか、あるいは役立たなかったかの確認も含めて。メンバーの医師も一緒に山小屋を回り、感染予防策に関して意見交換しています。ひと夏を超えて、やっと手探りしていたものが見えてくるのかもしれませんが。情報を磨いていくことは、とても時間がかかります。そのほかにもTeam KOIの動きは少しずつ広がってきています。Team KOIのメンバーは、普段は一匹狼のように「点」で活動しているメンバーですが、何かがあると集まって「面」になる。とても柔軟性のあるチームなんですよ。

——オンラインでのミーティング手法なども広がり、チーム間の物理的な距離はさほど問題にならなくなってきました。まさに新しい時代のチームのあり方ですね。「KOI」という名称もユニークです。

柏 「KOI」というのは、ハワイ語である意味をもつんです。あとづけになりますが、山に「来てね」、team KOIに「来てね」、「濃い」つながり、山に「恋する」。いろいろ掛かってます（笑）。Team KOIはコロナがきっかけで立ち上がったチームですが、活動の輪を広げていきたいと思っています。

（聞き手：新井梓）

Team KOIのサイト (note)
<https://note.com/teamkoi>



前っちの山と酒

酒の名前で“鯨波”と聞けば、私だったら海の酒を連想します。しかし、岐阜は中津川の酒でして、由来が面白いんです。いわく「山の上を流れる雲が大海を泳ぐ鯨に似ていたから」だとか。なんと風流な銘柄でしょうか。醸造元は標高600m付近にあたり、木曽川を挟み中央アルプスを望む立地で、大きな鯨が頻繁に眺められるのでしょ。蔵近くにある奥三界山は阿寺山地の“南の雄”と評されております。山で2つ逢えるのはここだけではないでしょうか。



◆紹介したお酒と山

銘柄：鯨波純米ひやおろし（恵那醸造・岐阜県中津川市福岡）おすすめの呑み方：「常温～日向燭、冷酒でもよし」

奥三界山（奥三界岳）：川上林道ゲートよりピストン（『新版日本三百名山／登山ガイド・中』日本山岳会編に詳しい。*文中情報も本書より引用）（青年部 前川晋也）

お願い

引越しやその他の事情で登山道具が不要になった方は、YOUTH CLUBの共同装備に譲ってください（使用可能なもの）。お申し出は本部事務局まで。折返し連絡いたします。

◎ YC の支部紹介◎ 四国支部

四国ユースの活動

山を介した大切なユースの人たちとの縁

四国支部のユースクラブは最近、活動が低迷している。夢中で山に打ち込んでいた彼ら彼女らも仕事と家事が忙しくなったからだ。実はこれは嬉しいことで、みんな、山の舞台にいずれ復活することを信じている。山は決して逃げはしない。活動の低迷はひとときと思う。四国支部のユースの活動を振り返りながら山登りについて考えてみたい。

四国支部のメンバーは幸せだった。支部ができて間もなく、本部にユースクラブができ、交流することができたからだ。地方の支部にとって、これほどありがたいことはない。特に剱岳の合同合宿で過ごした数日間はよい思い出だ。

その頃、四国支部のユースメンバーは沢に熱心に入っていて「いずれ、記録を本にまとめよう」と言っていた。四国の沢に関する本がなかったからだ。ある年の剱岳の合宿で、四国支部の^{のいち}乃一（旧姓長瀬）美代子さんが四国の沢の写真を披露すると、高い関心をもってくれた会員がいたという。

そんな縁から本部と四国支部との合同沢登りの計画が持ち上がった。2014年7月20日、愛媛県西部の滑床溪谷の雪輪沢だった。滑床は「日本百名谷」の一つ。雪輪沢には日本百名瀑「雪輪ノ滝」が掛かっている。雪輪ノ滝は1988年に「日本10名瀑」（フジテレビ）の一つとして紹介され、90年に日本百名瀑に選ばれた。滝は全長300mの滑めの5層からなり、登山道から最下層が見える。

計画が持ち上がった時、本部ユースの幹部の人たちに対して「さすが、すごい実行力だ」と畏敬と感謝の念が湧いた。大げさかもしれないが、小島烏水が日本山岳会を作ったのは31歳（間もなく32歳）で、彼も今でいうユースの一員だった。烏水は山岳会を作る前の29歳の夏には、誰もが悪魔が住むと信じる槍ヶ岳に登山家として日本で初めて挑み、登った。烏水はその時、家族に槍ヶ岳に登ることは話していなかったといわれる。白骨から霞沢に入り、白沢を下って上高地に出て見事に登頂した。一般的な登山の実行力の裏には「抑えがたい未知への憧れ」があ



全長 300m ある雪輪ノ滝の一部

ると思う。そこには見識と情報、悲喜こもごもの経験、仲間との強い信頼がなければならぬ。本部ユースの実行力は烏水から受け継がれていたのか。

先の雪輪沢の沢登りを思い出すと、しばらく登山道を歩いて雪輪ノ滝から入渓した。前夜の飲み過ぎをやや後悔しながらだった。本部から野澤誠司さん、岩本崇さん、直江 俊 弉^{しゅんすけ}さん、松延優太さん、四国支部からは6人が参加した。幅広い滝に登りたい所を見つけてしわしわと進み、滑り落ちないように四苦八苦するシーンもしばしばだった。今も懐かしい光景、キャアキャアという声さえも思い出される。

沢はどんどん傾斜が増し、スリルが充実感に変わった。爽快な印象の谷が続き、楽しみにしていた大嵩ノ滝は、奥深い山腹の岩壁に掛かっていた。上段15m、下段20m。おもちゃの水鉄砲をたくさん用意していて、水流が減るまで、みんなで打ち合っ^て楽しんだ。好天にも恵まれ本当に楽しい交流登山になった。

その後も本部と四国支部との交流は続き、2016年、自然保護全国集会の一環では高知の工石沢^{くし}や徳島の祖谷の霧谷に入った。2018年には剣山の大剣谷も遡行し、石鎚山に登り、剣山から三嶺への縦走もした。四国支部は菅生ロッジ（管理人は仁木稔会員）という無人ヒュッテを所有していて、そこでの火を囲んだ宴も楽しかった。

時代は異なっても、人が山から学ぶものは多くあり、学んだものは人の社会で必ず生きると思う。山で知り合ったユースの人たちとの縁を大切に今後山登りを続けたい。（尾野 益大）

連載④新型コロナウイルス感染症(2019-nCoV)



登山の視点から考察してみた

かかる災禍で、医療関係者・生活基盤を支えてくれる立場でお働きの皆様に感謝の意を込めて、今私たちが出来る登山について記したいと思います。

登山のリスク回避は以下の項目に整理できます。

- ・事前調査（山の特性の理解・リスクの洗い出し）
- ・リスク回避の想定と装備の用意
- ・山でリスクに遭遇しない努力
- ・日常のトレーニング（体力・能力的リスクの危険レベルを下げる）

これを新型コロナウイルス（2019-nCoV）感染症に該当させて整理すると、

- ・ウイルスの特性を理解
- ・感染対策と感染防止の装備
- ・感染リスクに遭遇しない努力
- ・リスクレベルを下げる努力

になると思います。リスク回避と努力については多くの提言がされているのでそれを参照していただくとして、最重要なのは以下でしょう。

- ①登山の前後を含め、ヒトとの間合いが取れない場所・時間・登山形態を避ける。
- ②マイ手指消毒キットで手洗いを励行する（アルコール度70%以上を推奨。）
*店頭・駅等の手指消毒液は多くの方がボトルに接触しているので危険

よく取沙汰されるマスク・サンバイザーは感染防止に効果がありません。約2m 間合いをとることの不可能なコースは避けるべきで、医療用マスクでもなければ、エアゾール感染は防ぐことは不可能です。あくまでも、自分が他人に感染させない効果しかありません。従って感染リスク管理はまずコース選択にあり、限界のある道具使用前提の登山は不可と考えましょう。登山中のマスクは呼吸を妨げて、疲労・熱中症の危険を増大させるので着用しないようにしましょう。

他にも手袋など道具で感染予防・感染させない対応策が議論されていますが、行動様式（場所・時間・登山形態）でリスク回避をすることが本義で、道具は二義です。本義でリスク回避が出来ないと判断したときは、登山を中止しましょう。今回のコロナ災禍は私たちに付和雷同登山を捨てて、登山本来の姿である、未知の探求に戻れと示唆しているのではないのでしょうか。（東 秀訓）

